

古 郡 鞆 子

## 『非正規労働の経済分析』

東洋経済新報社 1997.1 ix+268 ページ

本書は、非正規労働者、女性労働者の経済分析に関する著者の研究業績を一冊の書物にまとめたものであり、また生活時間も含めて新しい視点から労働経済学を書き直した書物でもある。

非正規労働と言えば「女子パート労働」の問題等が想起されるが、本書の優れたところは、問題対象を狭い範囲に限定せず、非正規労働者を経済学の枠組みの中でどう扱うかとした視点の広さである。近年、非正規労働者は増加の一途にある。構成比としては既婚女性を中心とした「呼称パート」(パートと呼称される者)が大きい。派遣労働者、アルバイト、嘱託、フリーアルバイターなども含まれる。さらに男性、若年層、高齢者層にも拡大している。女性の育児・家事負担の軽減や、高齢者の増加といった供給側の要因ばかりではなく、需要側の要因も非正規労働化を促すこと、それも、サービス経済化が進むほど、企業内部労働市場が不経済となり、人間も外部から必要に応じてリースする変化がもたらされることなどが指摘される。

続いて失業、労働時間、労働組合、税制、社会保障の問題が扱われる。労働経済学でなじみのあるこうした項目を「非正規労働」という視点から見直していく。戦後、あるいは高度成長期の社会制度の形成時には予想されていなかった大幅な非正規労働者の増加の中で、税制、社会保障(雇用保険、年金、育児休業制度)、労働組合、退職金制度などが非正規労働者の労働供給あるいは所得分配、賃金形成にどのような歪みを与えているかを分析し、またどのような変化が望ましいかを探る。

著者の語り口は冷静ながら、非正規労働の将来像にそこはかかない希望を評者は感じた。短時間労働や非正規労働を中心とするフロー型の労働市場は「怠惰な人間の労働形態ではなく、働く側の価値観の変化に対応した勤務形態である。」とし、女性の縁辺労働の長い歴史を見ると、身分が不安定になりがちなこうした労働形態には単純には喜べないとしながらも、労働の多様化自体には労働の人間化を推進

している点もあると指摘している。その上で、筆者は、非正規労働を今日の「正規」の就業形態として正當に認識しても良いだろうとする。

現状では、評者の知る限り、いわゆるパート労働者の賃金は依然としてきわめて低く、昇進機会も限られている。しかし今後について、非正規労働者が、将来性のない割りの悪い仕事であるか、家庭責任と仕事の両立を図れる多様な働き方の一つであるかは、パート労働者に対して正規社員と同様に労働に応じた適正な処遇と身分の保障がされるかどうか、税制や社会保障制度(退職金、社会保障制度、育児休業制度など)の設計に依存しよう。男性が世帯主として家族を扶養する立場にあることを前提に、世帯ベースで構築された現在の制度は、非正規社員の就業を抑制し、また家庭事情で転職・離職を経験せざるをえない女性労働者には不利である。筆者は「個人単位」での制度設計を提唱する。高齢化社会の入り口を迎え、また若者層の意識変化が転職率を上昇させ、就業の多様化が進んでいる今日、この提案は十分に現実的である。

ただし景気の調整弁として機能してきた非正規労働者にかわる景気のクッションをどのような仕組みによって代替させるのかという疑問は未解決である。安全ネットを手厚く広げることは反面で失業や経済停滞を生みやすい。非正規労働者が正規化された時、正規労働者の失業も増大していくであろう。しかし、価値観が多様化し、個人差が拡大していく中では、非正規社員の調整弁による世帯所得の安定というメカニズムは、支え切れない制度疲労を引き起こしつつあるのかもしれない。

第3部では、生活時間、家族、ライフサイクルと就業、生活と余暇など、家族の問題が扱われる。ここでは、生活時間と就業時間を行き来する人間という視点で、家庭内生産を含めて分析されている。非正規労働の選択は、生活時間、家庭内時間の選択でもあるからである。

「組織化と法」は短い章であるが、労働組合あるいは法が、非正規労働者の低賃金を生み出す市場メカニズムに対してどのような効力を持ちうるかを扱った興味深い章である。パート比率の上昇に伴い、パート抜きの労働組合では組織比率が益々低下することは必須である。しかし、組合はパートタイマーの組織化に本腰を入れて取り組めない事情もある。雇用保障の点で正規労働者と非正規労働者には利害対立があるからであり、また家計補助の主婦労働者の

組合への関心も低い。著者の実証分析では組合化はパート賃金を8%程度上昇させることが示されている。そこで著者は、過渡的にパートタイマー独自の組織を結成しこれを援助する形で既存の組合との統一をはかる方法がもっとも現実的かもしれないとしている。

評者は、女性労働を研究テーマとする中で、著者の論文に度々出会ってきた。そこで、覚悟して「取り組む」つもりで、本書を開けたが、数式、計量分析や難解なモデルはほとんど補論にまわされており、

経済学の初学者も含め平易に読みこなせるように工夫されている。本書は、「非正規労働」の問題を幅広い読者に対して分析のまな板に置くことに、大きく役立つと思われる。また非正規労働の研究者にとっても、共通の出発点として常に参照される役割を果たすだろう。客観性、視点の広さ、平明さ、そして非正規労働の一つの将来像も指し示した本書は、この分野を研究しつづけて来られた古郡氏からの贈り物と評者は感じた。

[永瀬伸子]

農 業 経 済 研 究 第 69 卷 第 4 号

(発売中)

都市近郊農業の外部経済効果の計測……………寺 脇 拓  
——二段階二肢選択 CVM における WTP 分布のノンパラメトリック推定——

《研究ノート》

青果物卸売市場における品質評価の計量分析……………小 島 豪  
社会的経済余剰概念を用いた森林による水源涵養機能の経済評価  
——生活用水を事例として——  
……………赤沢克洋・佐藤豊信・池上博宣

《談話室》

新農業基本法の方向……………井 上 和 衛  
——日本学術会議・農業経済学研連シンポの概要——

《書 評》

Hitoshi Yonekura, *Farmers and Traders a Changing Maize Market in East Java*  
……………横 山 繁 樹  
岩崎徹編著『農業雇用と地域労働市場—北海道農業の雇用問題—』……………寺本千名夫  
暉峻衆三編『日本農業 100 年のあゆみ』……………宇佐美 繁

《会 報》

編集委員会だより

B5判・46頁・定価1280円(本体1219円) 日本農業経済学会編集・発行/岩波書店発売